

西泰
自然神教
五

7
24

甲
三
四
奔

| | | | | |
|-----------|---|---|---|---|
| 東 京 圖 書 館 | | | | |
| 四 | 四 | 一 | 七 | |
| 冊 | 号 | 架 | 函 | 類 |

明治九年三月

泰西自然神教

文部省



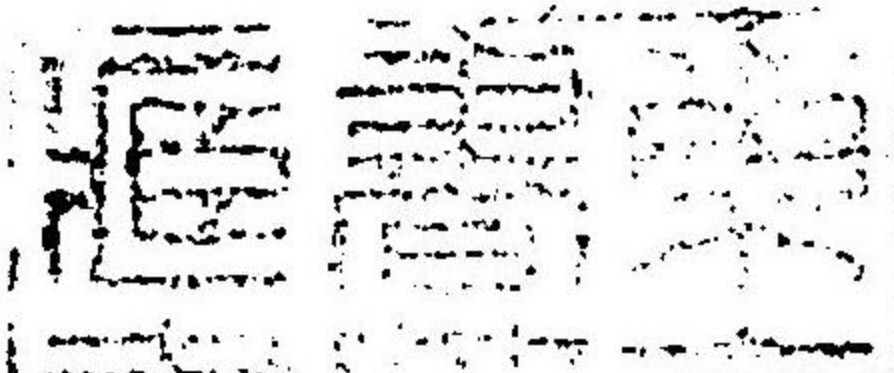
第五章

心ノ無體ナルヲ論ス

明治九年文部省交付

箕作麟祥 譯述

此ニ今心ヲ指シ無體ナリト言フハ蓋シ心ハ一箇ノ物體ニ非ス特ニ物體ト其質ヲ異ニスル者タルヲ言フニ在レハ更ニ之ヲ申言スルニ凡ソ物體ハ自カラ心ト相異ナル一種ノ性質ヲ具ヘ其性質ハ獨リ物體ノミニ限リ而シ心ナル者モ亦自カラ物體ト相異ナル一種ノ性質ヲ具ヘ其



性質モ亦獨リ心ノミニ限リ此二種ノ性質ハ互ニ全ク相異ナルカ故ニ其性質ヲ具有スル者モ亦互ニ全ク相異ナルヲ決ス可シ因テ心ト物體ノ二者互ニ其性質ヲ異ニスル之レカ模様ヲ此章中ニ記載セントス
第一 自覺ト意思ノ二性ハ敢テ物體ニ屬ス可キニ非サレ凡ノ心ハ此二性ヲ具有スルカ故ニ心ノ物體ニ非サルヤ明カナリ
凡ソ宇宙ノ萬物ニ自覺意思ノ二性ヲ具有スル者アラサルハ吾人ノ了知スル所タリ故ニ吾人

ノ心ニ自覺意思ノ性アルハ物體ト其必ス相異ナルノ證タリ
自覺意思ノ二性ハ原ト物體ニ屬ス可キニ非サレハ如何ニ其物體ヲ高尚微妙ナラシムルモ得テ此二性ヲ具有セシム可キニ非ス故ニ心ニ非サレハ此二性ヲ具有スル能ハサル譬ハ猶大理石ニ天然ノ線條アルニ非サレハ如何ニ人工ヲ用フルモ得テ其線條ヲ彰著ナラシムル能ハサルカ如シ
又自覺及ヒ意思ノ二性ハ物體ノ成分子如何ニ

其形ヲ變シ或ハ其位置ヲ易フルモ得テ之ヲ其
物體ニ具有セシム可キニ非サレバ物體ノ大サ
ヲ増加シ或ハ其形ヲ變易セシムルハ容易ニ之
ヲ爲スヲ得可ク然リ而シテ其此ノ如キハ蓋シ物
體ノ大サ及ヒ形ノ二性ハ原ト物體固有ノ性質
タルニ出テ且ツ然ノミナラス凡ソ物體ノ大サ
及ヒ其形ヲ變セシメ以テ其固有ノ性質ヲ幾許
カ増減スルハ亦敢テ能ハサルニ非スト雖モ之
レカ爲メ其固有ニ屬セサル性質ヲ新タニ性
シム可キニ非ス之ヲ生セシムル者ハ獨リ造化主

ノカニ在ルノミハトレイ之ヲ論ンテ曰ク物
體ト動行トハ縱令微妙ニ之レヲ細分シ如何ニ
其理ヲ考究スルモ到底物體動行ノ二者ニ止マ
リ敢テ其他ノ品質ヲ生シ得可カラサルハ是レ
余ノ明カニ解悟識認スルニ容易ナル所ナリト
ソルエツチ、デビーノ曰ク如何ニ物體ノ成分子ヲ
細分シ或ハ之ヲ微妙稀薄ナラシメ或ハ其位置
組成ノ方ヲ變易スルモ之レカ爲メ其物體ニ感
覺ノカヲ與フ可キニ非ス又感覺ナキ粗糙ノ微
分子ヲ如何ニ編合スルモ之レニ因リ以テ其智

カヲ生セシム可キニ非サル固ト分明ナレハ或
 ハ此等ノ事ヲ爲シ能フ可キヲ想做スカ如キハ
 猶行星ノ其意思ヲ以テ太陽ヲ巡回シ砲彈ノ道
 理ヲ解シ以テ弧線ニ飛行スルヲ思惟スルト取
 テ異ナラサル可シ

第二 悟覺及ヒ意思ハ唯其一ニシテ分ツ可カ
 ラサルニ就キ以テ之ヲ觀ル時ハ悟覺及ヒ意思
 ノ源(即チ心)モ亦唯一ニシテ分ツ可カラス故ニ
 其質ノ必然物體ニ非サルヲ證ス可シ
 又若シ心ヲ有體ナリトセハ心ハ必ス數箇ノ分

子ヨリ成リ其各分子毎ニ皆自覺意思ノカヲ具
 フ可シ蓋シ物體ノ分子ハ互ニ密接並在スト雖
 正固ト互ニ其感ヲ同ウスルヲ得可キニ非ス然
 ルニ夫ノマテリアリスト心ハ物體ヨリ成レル
 説ヲ主張スル輩
 ノ機關ト謂ヒ單一ト稱スル者ハ其實無數ノ分
 子ヨリ成リ其各分子ハ皆同時ニ外物ニ觸動セ
 ラル可ク故ニ外物ノ五官ニ觸ル、毎ニ神經體
 或ハ腦隨ノ各分子及ヒ意思ノ機關ト想做ス體
 格ノ各部ハ皆必ス之レカ爲メ感動セラル可シ
 ラッゲノ神歌ニ曰ク

夫レ物體機關ノ如キバ無數ノ分子ヨリ成リ
 其分子ノ塊ハ細カニ之ヲ考窮スルモ智力ナ
 ク活氣ナキハ猶泥土ノ塊ニ異ナラス然ルニ
 若シ此世ニ於ケル凡百ノ事物ヲ人ノ悟覺ス
 ルヲ僅カニ唯其物體機關ニ感觸スルニ過ギ
 スト為サハ如何シテ吾人ノ平常自覺スル心
 ノ單一合同ナルヲ保存シ得可キヤ又如何シ
 テ吾人ノ一時ニ千萬ノ意思ヲ發生シ以テ其
 互ニ渾合矛盾抵觸スルヨリ靈魂ノ紛亂混淆
 ヲ免カル、ヲ得可キヤ

又フウエウエルノ曰ク凡ソ吾人數箇ノ事物ニ
 注意シ以テ或ハ其相同シク以テ或ハ其相異ナ
 ルヲ知ラント欲セハ先ツ其一事一物ノ常ニ一
 事一物タルヲ解セサル可カラズ而シテ之ヲ解ス
 ルニハ敢テ心ノ所作ヲ要セス唯五官ノ感覺ノ
 ミニ因リ以テ足レリト爲ス可キカ如シト雖モ
 此ニ少シク注意ヲ加ヘ以テ考フル時ハ僅カニ
 唯五官上ノ感覺ノミノ之ヲ能クス可キニ非ス
 心ノ所作ノ缺ク可カラザルヲ知ル可シト而シ
 又斯ク吾人ノ身體機關上ノ諸般ノ感觸及ヒ綿

々。繼發スル數種ノ意思ヲ統合シ以テ一ト爲ス者。即チ心ハ要スルニ必ス唯、一ナラサル可カラス。而ノ其唯一ナル者ハ必ス亦無體ナラサル可カラス。

第三 吾人等己レノ唯一タルヲ自覺ス。凡ソ各人ハ皆己レノ唯一ニシテ分ツ可カラサルヲ覺エサルナク故ニ自覺ナル者ハ之ヲ分テ其一分ハ此處ニ在リ他ノ一分ハ彼處ニ在ルヲ思ヒ得可キニ非ス。蓋シ人ハ間、自カラ其意ノ相抵觸シ己レノ心中ニ彼此相抗鬪スル思念ノ生

スルヲアリト雖、己レハ常ニ事物ヲ覺知スル唯、一箇ノ者タルヲ疑ハス。因テ思フニ物體ハ固ト之ヲ分テ以テ數箇ト爲ス可レト雖、心ハ單一ニシテ分ツ可カラサルハ心ノ物體ニ非サルヤ明カナリ。バトレルノ曰ク心ノ唯一ニシテ分ツ可カラサルハ自覺ノ唯一ニシテ分ツ可カラサルニ因リ以テ之ヲ證ス可シ。今試ミニ思ヘ若シ物體分子ノ動行全ク唯一ニシテ分ツ可カラサルカ爲メ其動行ノ此一分ハ實在シ彼一分ハ實在セスト

爲ス可キノ理ナシトセハ其動行ノ主タル分子
 モ亦得テ分ツ可カラズ因テ亦之レニ全シク人
 ノ此世ニ現存スル自覺ノ分ツ可カラサル時ハ
 其自覺ノ一分ハ此處ニ在リ他ノ一分ハ彼處ニ
 在ルヲ思惟ス可カラズ故ニ其自覺ノ力及ヒ其
 カノ主即チ心モ亦得テ之ヲ分ツ可カラズ而メ
 心ナル者ハ斯ク之ヲ分ツ可カラサレハ其身體
 ノ機關ト相異ナルヲ明カナリ
 ドクトルブラウンモ亦此論理ヲ詳細ニ解明セ
 リ

very reasonable opinion

第四 各人皆己レノ常ニ同一タルノ確信

凡ソ道理ヲ辨スル者ハ己レノ十年或ハ二十年
 前ト同一ノ人タルヲ敢テ疑ハサル可ク然レハ
 吾人ノ身體ハ常ニ間斷ナク損耗變化スルカ故
 ニ通常世人ノ信思スル所ハ人ノ身體ハ大約三
 年毎ニ全ク變易ス可シト爲セハ其常ニ同一不
 變ナルハ獨リ心ノミニ限ル可シ蓋シ吾人ノ身
 體ヲ編成セシ分子ノ既ニ其結合ヲ改新シ以テ
 或ハ他人ノ成分トナリ或ハ鳥獸草木金石ノ成
 分ト成ルニ及ヒシハ猶現在ノ身體其死亡ノ後

ニ全ク融化シテ更ニ其結合ヲ改新ス可キカ如ク然リ而メ身體成分ノ斯ク更損耗轉換シ以テ其常ニ或ハ増加シ或ハ減少シテ終ニ全ク一變スルカ如キハ顧ミルニ吾人ノ常ニ己ノ同一不變ナルヲ確信スルト相矛盾シ以テ並行ス可キノ理アルヲ知ラス此ニ由テ之ヲ觀レハ己レノ常ニ同一不變ナルヲ確信スルハ心タルカ故ニ其確信ノ心ハ必ス全ク物體(即チ身體)ト異ナリ常ニ永遠不變タルニ疑ナシアルビトトツトノ詩ニ曰ク

嗚呼我カ身體ハ秀絶ノ巧妙ヲ極メ以テ之ヲ組成シ其關節ハ一モ我カ意ノ命ニ應シ以テ動かサル者ナク而メ其身體ノ變化スルハ猶夫ノ樹木ノ膏腴ノ土地ニ培養セラレ以テ初メハ生長シ後ハ凋衰スルカ如シ余ハ我カ身體ヲ指シ以テ我レト言ハス我カ物ト言フ我カ身體ノ成分ハ常ニ變化スト雖モ我カ心ノ不變ナルハ猶即樹ハ屢變換スト雖モ其即主ハ常ニ變換セサルカ如ク又心ノ體ト異ナルハ猶流水ノ游泳者ト異ナルカ如シ

又ジンソンノ曰ク諸解剖家一定ノ論説ニハ凡
 ソ腦ノ全體ハ畢生間其更新スル數回タレハ少
 年間ノ其成分ハ壯年ノ際ニ至リ毫モ存在スル
 者ナシトスレモ少年間一旦其腦ニ印摸シタル
 圖像ニ於テハ其彫鏤セシ小槓腦ヲノ全部ヲ舉
 ケ棄滅シタル後ニ猶能之ヲ記念スルヲ敢テ稀
 ナリトセス故ニ夫ノ記憶力ナル者ハ物體中ニ
 存スルニ非ス更ニ其他ノ處ニ存スルヲ知ル可
 シ

第五 心ハ體ノ羈束ヲ受ケサルノ理

夫レ身體ノ壯康ナルト其病患ニ罹ルトニ因リ
 以テ大ニ心ノ所作ヲ變動セシムルハ人皆常ニ
 之ヲ知リ又身體中或部ノ景狀或ハ其特別ナル
 功用ノ模様ニ因リ以テ心力ヲ増減セシムルハ
 亦人ノ常ニ許認スル所ト雖モ敢テ此等ノ實事
 ヲ以テ人類ノ自覺及ヒ意思ハ機關ノ功用或ハ
 身體所作ノ成跡タルヲ決ス可キニ非ス此ノ如
 キハ唯其自覺及ヒ意思ノ力ヲ具有スル心ナル者
 ノ常ニ身體ト連接シ以テ身體ノ機關ヲ其能力
 ヲ發スル器具ト為シ用フルニ在ルヲ決ス可キ

ノミ是レ人ハ身體機關ノ病患ニ罹ル時其心ノ
功用モ之カ爲メ屢亦妨害ヲ被ル所以ナリ然リ
而メ又身體機關ノ病患ト心ノ功用ノ妨害トハ
常ニ其並ヒ發スルヲ普通一般ノ定則トナセ凡
此ノ如キモ亦其畢竟ハ心ノ功用ニ妨害ナカラ
シムルニハ身體又ハ其機關ノ壯康ナルヲ必要
ト爲スノ證タルニ過キサレハ之ヲ大氣ト視官
トニ喩フルニ大氣ノ清爽ナルハ固ト視官ノ功
用ニ必要ナレ凡其清爽ナルハ敢テ吾人ノ視官
ヲ具フルノ原因タルニ非サルカ如ク因テ顧フ

ニ凡ソ事物ニ附帶セル要件ハ縱令普通一般ノ
得テ缺ク可カラサル必須ノ者ト雖凡敢テ之ヲ
眞ノ原由ト混全ス可カラサルハ猶器具ト之ヲ
用フル人ヲ混全ス可カラサルカ如シ故ニ上帝
ノ靈智ニ因リ人ノ心ヲシテ其身體ト連合セシ
メ且ツ其心ノ模様ヲシテ身體ノ模様ト相管セ
シメ又身體ヲ器具ト爲シ心ヲシテ自由ニ之ヲ
用ヒシムルト雖凡心ハ亦全ク其身體ノ維係ヲ
解キ身體ノ脆弱ナルト其感覺ヲ同クスルヲ肯
セサルヲ間少ナカラス而メ又若シ心ヲ一箇ノ

然神教 卷三 效 諸 卷

物體ト思做シ或ハ活機造法ノ成跡ニ過キスト
思做ス時ハ其理必ス身體ノ病ニ罹リ或ハ活機
造法ノ錯亂スル毎ニ心ノ功用モ亦其妨害ヲ受
ク可シト雖凡敢テ現ニ然ルニ非サレハ或ハ身
體ノ重疾ニ罹リ或ハ重傷ヲ被ルモ之カ爲メ特
ニ心ノ功用ヲ害セサル間少ナントモ且ツ獨
リ然ルノミナラス或ハ身體ノ重疾ニ罹リ羸瘦
衰耗ノ餘幾ント死ニ垂スル時ト雖凡心ハ敢テ
其氣力ヲ失ハ静寧深沈ナル者アリワルレル
ノ詩ニ曰ク

靈魂ノ居ル暗宅 身軀ヲ云フ ハ縱令破壊倒覆ニ垂
スルモ清新ノ光明ハ積歲漸生ノ漏隙ヨリ常
ニ必ス射入ス

然ルニ又或者ノ説ニハ凡ソ病ノ獨リ身體ヲ衰
耗セシメ心ヲ妨害セサルカ如キハ腦ノ壯康ニ
シテ病患ニ罹ラサルニ因ルト言ヒ以テ前説ヲ
駁セントスル者アレバ若シ試ミニ此説ニ從ヒ
心ヲシテ腦ノ功用ニ過キサラシムル猶消化ハ
胃ノ功用ニ過キス呼吸ハ肺ノ功用ニ過キサ
ルカ如ク相同視スル時ハ其理自ラ腦ノ傷害ヲ觀

卷三 十一 下

テ亦其功用即テノ傷害ヲ觀ルヲ得可シト雖氏
 取テ然ルニ非サレハ縱令腦ノ病ニ罹リ或ハ傷
 ヲ被ルヲ點視スルモ得テ其人ノ心ノ光景ヲ知
 ル可キニ非ス故ニ腦ハ重疾ニ罹ルモ之レカ為
 ノ心ハ敢テ妨害ヲ被ラサル者間少ナシトセシ
 又或人ノ論ニ前説ノ如キハ腦ノ機關ニ二箇アリ
 リ而ノ其中ノ一箇ハ縱令害ヲ被ルモ他ノ一箇
 ノ害ヲ被ラサル間ハ其功用ニ妨害ナキ猶一眼
 ヲ以テ物ヲ視一耳ヲ以テ音ヲ聽クカ如ク其理
 ノ相同シキヲ言ヘ凡試ミニ問フ若シ腦ノ機關

ヲ二箇アリトセハ其事物ノ悟覺ハ如何ニシテ
 唯一タルヲ得可キヤ因テ思フニ事物悟覺ノ常
 ニ唯一タルハ即チ心ノ唯一タルノ証タリ故ニ
 心ハ物質タルノ説ニ與ミスル某氏ノ論ニ於ケ
 ルカ如キモ吾人ハ皆身體ノ機關兩箇アリ而メ
 其知覺ハ唯一タルニ過キサルト各種ノ感覺機
 關ヲ用ヒ以テ諸物ノ品質ヲ覺リ各自ニ其諸物
 ヲ區別スルト各種ノ感覺ニ注意シ以テ自由ニ
 我カ意思ヲ發動スルノカアルト此三事ニ就キ
 以テ之ヲ考フレハ必ス其各感觸共通ノ中心ア

ルヲ信セサル可カラスト
 又人ノ心神錯亂スル時ハ其腦モ亦病ニ罹ルヲ
 居多ナリト爲セ氏其畢竟ヲ考フレハ腦病ハ恐
 ラクハ狂癲ノ成果ニ屬シ敢テ之レカ原因タラ
 サル可ク又腦病ハ心神錯亂ノ純然タル原因ニ
 非サル證ハ積歲甚劇ノ狂病ニ罹ル者ト雖モ其
 腦ハ毫モ病患ノ痕ヲ見サルニ在テ又之ニ反シ
 毫モ狂病ヲ患ヘス死亡セシ人ト雖モ其腦ハ甚
 劇ノ病ヲ患ヘタルカ如キヲ見ル敢テ稀ナラス
 而モ又狂癲ノ病ヲ患ヒ且ツ其腦モ亦病ニ罹ル

人ノ其狂病ハ猶依然タルニ其腦ノ全ク壯康ニ
 復スル者モ間寡ナシトセス
 又間狂癲病中ニ腦ノ病ニ罹ルニ非ス原來腦ノ
 不具ナルニ出ツル者アリト雖モ之ヲ以テ敢テ
 心ノ有體ナル證ト爲ス可キニ非ス因テ思フニ
 凡ソ人類感覺機關ノ不具ナル時ハ其機關ノ功
 用ニ瑾瑕ヲ生セシム可ク而モ腦ハ僅カニ一種
 ノ感覺機關ニ非ス各種感覺ノ機關ニシテ之ヲ
 統合スル所タレハ之ヲ稱シテ一切外部ノ事務
 ヲ悟覺スル器具ト謂フ可ク故ニ若シ腦ノ生レ

ナカラ不具ナル時ハ心モ亦自カラ昏暗ニシテ
 外部ノ事物ヲ瞭然悟解スル能ハサレハ其決定
 ニ錯置アリ意思理論ニ誤謬アル固ト言ヲ待タ
 サレ凡醫術ノ巧技ヲ盡クシ以テ腦ノ不具ナル
 ヲ療スル猶耳目ノ不具ナルヲ療シ以テ視聽ノ
 機關ヲ完全ナラシムルカ如ク爲ス時ハ其外物
 ヲシテ心ト相接セシムル器具即チノ完全ナル
 ニ至ルニ准シ心ノ功用モ亦自カラ完全ナルニ
 至ル可ク故ニ夫ノ教長バトレルノ言ニ於ルカ
 如ク吾人ノ目ヲ以テ物ヲ視ルハ猶眼鏡ヲ用ヒ

以テ物ヲ視ルト其理固ト一タレハ此兩者ハ共
 ニ器具タルニ過キス而メ人ノ腦ニ於ケルモ亦
 其一箇ノ器具タルハ猶耳目口鼻等ニ於ケルカ
 如ク唯其耳目口鼻等ト少シク異ナル所以ノ者
 ハ凡ソ此等ノ外官ハ僅カニ唯一種ノ感覺ヲ傳
 フルニ過キサレ凡腦ハ各種ノ感覺ヲ舉ケ之ヲ
 心ニ傳ヘ心ヲシテ之ヲ解セシムル一ノ階梯ヲ
 爲スニ在ルノミムルノ曰ク夫レ事物ヲ悟覺
 スルノカアル者即チハ百般感覺ノ主タレハ感
 覺ノ爲メニ敢テ生スルノ理ナク且ツ五官ニ因

リ以テ外物ヲ悟覺スル者即チノ先ツ存在スル
ニ非サレハ五官モ亦存在スルノ理ナシト此ニ
由テ之ヲ觀レハ世界各國ノ語ニ人體ヲ活動セ
ンムル一箇ノ力即チ無形無體ノ心神アリト言
フハ余モ亦確信スル所ナリト
又或人ハ吾人ノ心ト名クル者ハ未タ嘗テ之ヲ
見スト言ヒ以テ心ノ現存スルヲ駁セント為ス
ト雖氏顧ミルニ此論ノ如キハ畢竟唯耳目ノ感
ヲ以テ一切事物ヲ知識スルノ標度ト爲シ其他
ヲ考究セサル言タレハ譬ヘハ猶吾人ノ目ニ視

ル能ハス手ニ觸ル、能ハサル事物ニ於テハ一
切皆之ヲ此世ニ現存セスト言フカ如ク故ニ人
ノ心ハ固ト得テ之ヲ視ル可キニ非スト雖氏風
ノ如キモ亦之ヲ視ル能ハス又人ノ心ハ得テ之
ヲ度量ス可キニ非スト雖氏電氣ノ如キモ亦之
ヲ度量スル能ハス又人ノ心ハ得テ觸ル可キニ
非スト雖氏光ノ如キモ亦之レニ觸ル、能ハス
此ニ由テ之ヲ觀レハ敢テ人類ノ五官ニ感セス
以テ其視ル可カラス、度量ス可カラス、觸ル、可
カラサル大勢力ノ此世ニ現存スルハ敢テ奇ト

スルニ足ラサルナリ
 然ルニ又或者ノ説ニ心ノ功用ト稱スルハ身體
 機關ノ編制ニ因リ初メテ發生スル者ナリト言
 ヒ而メドクトルプリーストレイ等ノ如キハ專
 ラ此説ヲ主張シ以テ人ノ感覺及ヒ意思ハ其身
 體機關ノ編制ヨリ生セシ所ノ成跡タルヲ論ス
 ト雖氏身體機關ノ編制ノ人ニ於ケルハ固ト其
 生活ノ原因ニ非ス却テ之レカ成果タルハ凡ソ
 鳥獸草木ノ損傷セラレシ時忽チ其失フ所ヲ復
 レ更ニ以前ノ勢カヲ挽回レテ自カラ治スルニ

因リ以テ之ヲ觀ル可ク且ツ凡ソ原因ノ存在ス
 ルハ其成果ニ先タツ固ト敢テ言ヲ待タサレハ
 鳥獸草木ノ如キモ一旦其活力ヲ失フヤ機關ノ
 編制忽チ紊亂スルニ至ル

第六 夢

人ノ久シク勞動シ以テ身體ノ勢力疲困スル時
 ハ其勢力ヲ休憩セシムル為メ睡ニ就カサルヲ
 得ス而メ若シ心ト其能力トヲ以テ物質ノ者ト
 想做ス時ハ屢其休憩ヲ要スル猶身體ノ如クナ
 ラシメサル可カラスト雖氏心ハ現ニ敢テ然ラ

自然神教
新三
文部省

ス故ニ其身體醒覺ノ際ニ於ケルヨリ睡眠ノ際ニ於テ却テ間、勤勞ニ而メ若シ然ル時ハ心神ノ綽々タル恰モ猶妨害物ノ爲ノ地上ニ維縛セラ
ル、ノ懊苦ヲ免レ以テ異常ノ熱氣ニ憑リ想像ノ域ニ飛揚スルカ如シウイソソノ詩ニ之ヲ比
喩レテ曰ク

靈氣ハ夢中毫モ妨礙ニ罹ラス飄々乎トノ昇
降雄飛シ以テ欣喜ノ姿ヲ顯ハス

「スベクテートル」雜誌中ノ一條ヲ記セシ説者ノ
曰ク吾人ノ夢ニ於ケルヤ靈魂ノ天ヨリ賦畀セ

ラレシ勵勉力ノ一大證タルハ睡眠ノ際其勵勉
ヲ減損セサルニ因ル故ニ人ノ終日勤勞シ以テ
疲困セシ後ト雖凡其心神ハ猶疲勞セス常ニ勵
勉シ又感覺ノ機ハ休憩補修ヲ要スルニ至リ身
體ハ靈氣ト共ニ進往スル熱力ヲ失フノ後ト雖
凡心神ハ依然猶其能力ヲ發シ以テ其同伴者即チ
ニ身寐ヲノ更ニ進往ヲ得ルニ至ル迄敢テ休息セ
ス而メ此ノ如キハ畢竟心神ノ其妨碍ヲ免カレ
重荷ヲ却セシ際ニ於ケル娛樂遊戲ノ如シト
又ドクトルブラウンノ曰ク凡ソ吾人ノ夢中ニ

自然神教
卷三
七
文部省

於テハ其實吾人ヲ稱シ之ヲ我々身體外ノ者ト
謂フ可ク故ニ我カ身體ノ睡眠ハ即チ心神ノ醒
覺ナリト然リ而メ吾人ノ夢ニ於ケル其種類ハ
要スルニ皆身體ノ模様ニ關スルハ例ヘハ某種
ノ食ヲ喫スルカ如キハ必ス某種ノ夢ヲ夢ミル
者間少ナカラス故ニ往時ノ(自然妖術)ノ書ニ於
テハ夢中奇怪ノ事物ヲ見ルニ必要ノ食物等ヲ
定メ記セシト雖氏此ノ如キハ畢竟唯心體二者
ノ互ニ相係連スルヲ示スニ在テ體ノ眠ニ就ク
ノ際其心ノ勤勞スル所以ハ之ヲ解明スル能ハ

ス而メ又凡ソ吾人ノ夢ヲ構成スル想像ハ敢テ
新タニ發生セシ者ニ非ス畢竟皆吾人醒覺ノ際
ニ於テ之ヲ其心中ニ思念セシ者ニ外ナラスト
雖氏其想像ノ夢中ニ構成セシ姿ハ實ニ千態萬
狀ニシテ指數ニ違フラス故ニ其想像ノ構成ハ
睡中自カラ覺知セサル身體ノ機關ニ因リ以テ
來リ生シ敢テ心ノ能力ニ因ラスト謂フ言ノ如
キハ恰モ畫工ノ顔料板上ニ在ル數種ノ顔料ノ
敢テ畫工ノ材カヲ借フス自カラ相混合シ以テ
精巧ノ畫圖トナル可キヲ謂フニ似タリ

凡ソ吾人ノ夢中其心ノ功用ノ神速ナル實ニ驚ク可ク故ニ睡眠ノ際若シ外物ノ我カ五官ニ感シ而シ其能ク我ヲ醒覺セシムルニ至ラサル時ハ心ノ感覺ニ因リ新タナル想像ヲ神速ニ發セシメ且ツ僅々一瞬時間ニ實ニ無數ノ想像ヲ判然分明ニ相繼テ己レノ心中ヲ歷過セシム此ニ由テ之ヲ考フレハ心ノ物體タルヲ唱フル説ノ如キハ其理ニ合セサル敢テ疑ヲ容レス

第七 意思ノ力及ヒ自動ノ力

夫レ物體ノ本性ハ所謂情性即チ其景狀ノ變易

ニ抗スル性タルカ故ニ其安息スル時ハ永ク安息シ其動行スル時ハ常ニ動行シテ自カラ動行ヲ始ムルノカナク又動行ヲ止ムルノカナク且ツ其動行ノ方向ヲ變スルノカナキ者トス然ルニ人ノ心ハ自動ノ力アリ以テ唯僅カニ事物ヲ知得シ或ハ考思スルノミナラス或ハ志シ或ハ行フヲ得可ク且ツ動行ヲ始メ或ハ之ヲ止メ又ハ其動行ヲ繼續シ或ハ之ヲ變易スル等皆自由ナリトス

バキストルノ言ニ曰ク凡ソ物體ナル者ハ固ト

自然論

卷三

辯論

其安息或ハ動行ノ狀ヲ變易スル能ハサレバ苟
モ自由ニ動行ヲ始メ或ハ動行ヲ止ムルノ力ア
ル者ハ決シテ物體ニ非サルナリト
又或者ノ説ニ心ノ其意趣ニ動カサル、ハ猶物
體ノ外力ニ動カサル、ニ全シク心ハ外部ノ原
因アルニ非サレハ決シテ自カラ動行シ以テ功
用ヲ爲ス能ハス故ニ其自動ノ力ナキハ猶物體
ニ異ナラスト為セ氏顧ミルニ其心ヲ動カシム
ル勸諭、獎勵及ヒ其意趣ノ勢力、成跡ノ考思等ニ
於ケルカ如キハ外力ノ物體ニ觸レ或ハ此物塊

ノ彼物塊ニ衝突スルト全ク其理ヲ異ニシ畢竟
此等ノ諸事ハ皆心ノ功用ニ屬シ心ノ中ニ保合
スル者タレハ心ノ功用ヲ為シ或ハ其動カサル
、方法ハ物體ノ動カサル、方法ト全ク其趣ヲ
異ニス故ニ此二者ノ亦其本質ヲ異ニスルヤ判
然瞭如タレハ夫ノ物體ノ如キハ理論、說諭、勸獎、
勢威等ノ得テ動カス可キニ非ス又夫ノ論理學
ノ三段論法ヲ用ヒ或ハ諫規訓戒ヲ加フルモ毫
モ之ニ感ス可キニ非サレ氏心ノ如キハ縱令自
由ニ動作スル能ハス一箇ノ意趣ニ動カサレ或

ハ其意趣ニ吻合シ以テ動作スル者ト思倣スモ
其意趣ノカハ多クハ皆心ニ因テ發起レ或ハ心
ノ爲メニ一易セラル、カ故ニ外部ノカト全ク
其質ヲ異ニシ而ノ其意趣ノカニ從ヒ以テ動作
スル心ハ亦夫ノ外部ノカニ抗シ能ハサル物體
ト全ク其質ヲ異ニスル敢テ疑テ容ル可キニ非
サルナリ

第六章 靈魂ノ永存スルヲ論ス

抑靈魂ノ永存ヲ指示スル論理ハ分ツテ以テ二
種ト爲シ一ハ之ヲ道理上又天然上ノ論理ト名
ケ靈魂ノ本質ヨリ生スル所ノ論理ヲ云ヒ一ハ
之ヲ懿德上ノ論理ト名ケ人類ノ本性及ヒ景狀
ト相合視セシ上帝ノ性質ニ原ク論理ヲ云フ然
リ而メ凡ソ人類靈魂ノ未來ノ永存ヲ解明スル
論理ハ半ハ靈魂ノ本質及ヒ人類ノ景狀ニ原キ
半ハ上帝ノ性質及ヒ其意思ニ原キ以テ此兩者
ヲ兼ヌルカ故ニ此二種ノ分別ハ或ハ其當ヲ失

ノ可キノ恐ナキニ非ス而ソ其中ニ於テ道理上
 ノ論理即チ靈魂ノ本質ニ原ク論理ハ前章ニ於
 テ解明シタル心ハ物體ニ非サルノ理ニ因テ以
 テ生ニ通常其名クル所ハ下ニ記スルカ如シ
 第一 靈○魂○ノ○精○氣○タル○事○或○ハ○靈○魂○ノ○唯○一○タル○
 事○ニ○因○ル○ノ○論○理○

ロードブロウガムノ説ニ據ルニ若シ靈魂ノ或
 ハ物體タリ或ハ物體ニ類似セシ者タリ或ハ物
 體ノ成分ト联接シ以テ分ツ可カラサル者タル
 時ハ人類其身體ノ死亡後ニ能ク靈魂ノ存在ス

ルヲ思想ス可キノ理ナク身體ノ死亡スルト共
 ニ必ス亦其靈魂ノ滅盡スルヲ信ス可ク故ニ靈
 魂ノ物體ニ非サルハ即チ其未來ニ永存スルヲ
 指示スル諸説ノ基タリト然ルニロツクハ之ヲ
 駁シテ謂ラク凡ソ善道法教ノ大主眼ニ達スル
 ハ敢テ靈魂ノ物體ニ非サルノ證ヲ要セスト而
 ノステワートモ亦此事ニ就キ余ハロツクト全
 ク其説ヲ同ウスト云ヒ而ソ又教長ボルチユウ
 スノ説ニモ凡ソ靈魂永存ノ論理ヲ證スルニハ
 必スシモ其本質全ク身體ト異ナリ以テ物體ニ

非サルノ證ヲ要セスト云ヒ且ツドクトルワル
 レースモ亦ロドブロウガムカ靈魂永存不朽
 ノ理ヲ其物體ニ非サルノ證ニ憑倚セシメシカ
 爲メ大ニ同氏ノ論ヲ排議セリ因テ顧フニ靈魂
 ノ物體ニ非サルハ其本質ヨリ生スルニ非ス原
 ト造化主ノ意匠ヨリ生スル者タレハ蓋シ靈魂
 ノ物體ニ非サルヲ證明スル爲メ學士識者ノ特
 ニ心思ヲ費セシ所以ハ凡ソ人類ヲシテ其身體
 ノ死亡ヲ顧ミルヨリ自然其心中ニ生スル恐怖
 憂虞ノ念ヲ輕減セレメ且ツ上帝ノ意ハ身體死

亡ノ後ニ至リ猶靈魂ヲ存在セシムルニ在ルヲ
 解明シ以テ大ニ人心ヲ慰安セシムルカ爲メナ
 リ
 今此ニ人類死亡ノ際ニ於ケル其景狀ヲ考フレ
 ハ實ニ人ヲシテ膚立セシムルニ足ルヘク因テ
 其狀ヲ概言スルニ凡ソ人ハ死期ノ既ニ近クヤ
 壯歳強剛ノ日ニ於ケル渥丹豐隆ノ頰臉漸ニ其
 姿ヲ失ヒ身體病ニ嬰テ面貌全ク青白ニ變シ氣
 息奄々終ニ呼吸ヲ絶レテ初生ノ起源タル塵埃
 ニ歸スレハ其腐敗潰爛セシ身體ハ地虫ノ腹ヲ

飽カシムルニ供ス可ク故ニ人ノ此景狀ヲ思想
スルヤ必ス大ニ其心ヲ悸怖セシメ迷疑惶恐ノ
際百事全ク此ニ盡キ靈魂モ亦其身體ニ同シク
遂ニ消滅シテ體心共ニ墳墓下ノ地底ニ收埋セ
ラル、カ如シト雖モ更ニ沈思熟考スル時ハ其
恐悸ノ念ヲ減シ以テ心ヲ慰安セシム可キ數種
ノ因由アリ殊ニ心神ノ物體ニ非ス其精氣タル
カ如キハ最モ吾人ノ心ヲ慰安スルニ足レハ人
若シ苟モ一旦其心神ノ物體ニ非サルヲ確信ス
ル時ハ縱令其身體ハ死亡スルニ至ルモ其靈魂

ハ之カ爲メ敢テ消滅スルニ至ラス却テ其力勢
ヲ強壯ニシ以テ更ニ擴張セシメ又其身體ノ死
亡スルカ爲メ敢テ靈魂ノ感覺ヲ失ハシメス却
テ更ニ其動作ノ域ヲ廣メ身體ノ妨碍ヲ被ラス
自由無限ニ其力ヲ發シ得可キヲ解スルニ至ル
可シ
上ニ記スル所ニ就キ以テ之ヲ觀レハ心神ノ精
氣ニシテ其單純分ツ可カラサルハ身體物質ノ
亡滅スルヲ思フカ爲メ因テ生スル恐悸ノ念ヲ
輕減スルニ適應シ而メ又物體ノ變化ハ原ト皆

其性質ノ組成ニ係リ以テ其分ツ可キニ因ルト
 雖モ人ノ靈魂ハ得テ分ツ可カラサレハ敢テ亦
 溶解亡滅スルノ理ナシ是レ靈魂ハ自カラ滅盡
 スルノ力ナク又外部ノ力ヲ以テ滅盡セシムル
 能ハサルノ理ナリ或人ノ詩ニ曰ク

靈魂ハ其存在スルヤ毫モ虞慮ノ念ナク白刃
 ヲ見ルモ莞然之ヲ笑ヒ敢テ其銳利ヲ恐レス
 ト
 凡ソ今現存スル者ヲ變シ以テ現存セサル者ト
 爲スニハ無限ノ威力アルヲ要トス故ニ人ノ靈

魂ハ全能ナル上帝ノ親シク之ヲ滅盡セシムル
 所作アルニ非サレハ必ス永遠不朽ニ存在ス可
 ク是レ所謂靈魂天然ノ永存ニシテ其存在ハ自
 然ノ原因即チ第二等ノ原因上帝ヲ指シテ得
 テ之ヲ限制シ又ハ之ヲ滅盡ス可キニ非サルナ
 リ

千七百年代ノ初メニ於テドツドシュエル氏ハ
 人ノ靈魂ハ天然亡滅ス可キ者タレ氏洗禮ニ
 因リ以テ永存不朽ノ者タルニ至ルノ説ヲ主
 持シ而ノトーマス、ミールス及ヒビジョン、ノル

リスノ兩氏ハ之ヲ駁論セリ
 然レ凡人ノ靈魂ハ全能ナル上帝ノ意思ニ關セ
 ス以テ永遠不朽ノ者タル説ハ得テ之ヲ主持ス
 可キニ非サルカ故ニ苟モ體ト心ノ二者ノ其存
 在スルハ敢テ上帝ノ意ニ關セスト爲スノ説ヲ
 棄斥セント欲スル者ハ顧ミルニ此二者ヲ造リ
 シハ固ト上帝タレハ之ヲ滅スルモ亦同シク上
 帝タルヲ信セサル可カラス然レ凡ソ亡滅消
 盡ノ事ニ於テハ心ハ固ト言ヲ待タス物體モ亦
 確據ス可キノ證ナク又得テ之ヲ悟會スル能ハ

サレ凡心ハ固ト物ノ組成セシニ非サレハ得テ
 其分ツ可カラサルヤ分明ナリ此ニ由テ之ヲ觀
 レハ心ノ性質ノ分ツ可カラサル單純ノ精氣タ
 ルハ蓋シ上帝ノ意ニ於テ人ノ靈魂ヲ永存不朽
 タラシムルノ證トス可シレセロノ書ニ曰ク夫
 レ靈魂ノ性質タルヤ固ト單純ニシテ各種ノ混
 合調和セシ物ヨリ成ルニ非サレハ得テ之ヲ分
 ツ可キニ非ス而ノ之ヲ分ツ可カラサル時ハ其
 永存不朽タル明カナリト
 第二 靈。魂。ノ。能。力。ノ。秀。絶。廣。大。ナル。事。

凡ソ心神ノ貴重秀絶ナルヲ真正ニ料知セント
欲セハ能力ノ極メテ強盛ニ且ツ進歩ノ最高地
ニ達シタル不世ノ英村ヲ回想不可ク而ノ又縱
今尋常凡庸ノ人ニ於ケル其材智ヲ思想スルモ
要スルニ其人ノ材智ハ僅カニ唯此現在ノ下界
ヲ以テ其目的ノ極處ト爲スニ非サルヲ知ル可
シ蓋シ人ハ極メテ廣濶ナル知識ノ囊ヲ有スル
ト雖モ敢テ知識ヲ其囊ニ充タス能ハザレハ常
ニ現世ノ昏昧ナルト其完全ナラサルトヲ慨歎
シ又人ノ其身ニ享ク可キ幸福ノ量ハ極メテ廣

大ノ者ト雖モ亦此世ノ業ノ得テ己レヲ飽カシ
ム可キニ非サレハ更ニ貴キ幸福ノ源ニ浴シ以
テ自カラ壓足スルヲ思想シテ之ヲ懷ニ絶セサ
レハ豈ニ其日ニ疊々焉タルノ際一旦嗟然此世
ヲ去ルカ爲メ上帝ノ貴キ大業ノ忽チ此時ニ畢
智力進歩ノ期望ノ忽チ無益ニ屬シ至極ナル
幸福ノ思欲ノ忽チ烏有ニ歸スルノ理アラシヤ
顧ツニ吾人ヲ造リシ上帝ノ靈智及ヒ吾人ニ材
力ヲ賦與セシ上帝ノ靈明ハ必ス吾人ノ心ヲシ
テ更ニ來世ニ生存セシメ將來ノ世ニ於テ更ニ

知識ノ囊ヲ充タシメ幸福ノ思欲ヲ飽カシム可
 シ故ニ上帝ノ靈智ハ遙カニ此現世ニ優ル來世
 ニ於テ靈魂ノ能力ヲ全ク啟發セシメ幸福ヲ欲
 スルノ思念ヲ全ク廢足セシメ且ツ其靈魂ヲシ
 テ現世ニ於ケル昏昧障碍ノ憂ヲ免カレ無限無
 涯ノ幸福良善ノ道ニ駿々進歩セシムルニ在ル
 ヲ確信ス可ク若シ然ラサレハ得テ其理ヲ解ス
 可キニ非サルナリ

第三 人ノ靈魂ハ間斷ナク完全ノ道ニ向進ス
 ル事

アヂソシノ編纂セシスペクテトルニ曰ク凡
 ソ獸類ハ一旦完全ノ地ニ達スル時ハ敢テ更ニ
 其地ヲ超エ進ム能ハス故ニ數年ヲ出テス其亭
 有シ得可キ限内ニ於ケル諸般ノ才能ヲ悉ク享
 有シ縱令一萬年間此世ニ生存スルモ其能力ハ
 初メ之ヲ享有セシ日ト敢テ異ナラサル可ク而
 ノ今人類モ亦之レニ同シク其靈魂ノ智力ハ停
 息シテ進マヌ其才能ハ其極ニ達シ敢テ擴張ス
 ル能ハストスルカ如キハ思フニ其靈魂ハ不知
 ヲ々耗失シ以テ終ニ全ク滅盡スルニ至ル可シ

然ルニ此智カアル人類ハ常ニ間斷ナク其智カ
 ヲ増加シ此完全ノ模様ヨリ更ニ彼完全ノ模様
 ニ赴キ日ニ進テ己マサルニ人其未タ進歩ノ限
 域ヲ見ルニ至ラサル際ニ於テ僅カニ唯上帝ノ
 懿業ヲ仰視シ其仁惠靈智威力ノ一端ノミヲ窺
 ヒ得而ノ頓ニ靈魂ノ消失滅盡スルニ至ル可キ
 ヲ信スルノ理アリヤ曰ク必ス其理ナカル可シ
 ドクトルゼームス、ヒュートンノ曰ク人ノ此世ニ
 於ケル生命ノ終期ハ要スルニ最初知識ヲ得ル
 ノ方便テダテタル五官ノ其カヲ失フノ期ニ過キス故

ニ死ハ來世ノ初メニシテ其期ニ至ルヤ身體消
 滅シテ靈魂獨リ生存シ其智カハ身體情慾ノ鼓
 動ヲ受ケス純粹清白ニ其進歩ヲ始ム可シト
 此說ニ抗論スル輩ハ皆曰ク人心ノ智カハ此世
 ニ於テ其完全ノ極地ニ達スルカ如ク而シ其証
 ハ人ノ智カハ壯年ノ際最モ銳ク老年ニ至リ更
 ニ衰フルニ在リト余ハ之レニ答ヘテ言ハシ曰
 ク人ノ智識カノ老年ニ至リ衰耗スルハ蓋シ其
 身體機關ノ鈍溢ナルヨリ其カヲ發動セシム可
 キ材用供備ノ足ラサルニ在テ敢テ其カノ亡滅

スルニ非ス故ニ更ニ其カヲ發動セシム可キ新
 方便ヲ備ヘ以テ其機會ヲ得セシムル時ハ心神
 更ニ勃興シ忽チ完全ノ道ニ進ムヲ得可ク而ノ
 又此知識力ハ縱令其身體ノ衰頽ニ因リ共ニ同
 シク衰耗スルト爲スカ如キモ其善惡ヲ辨知ス
 ルカニ於テハ敢テ年ノ老スルカ爲メ衰耗ス可
 キニ非ス然リ而シテ人類第一ノ主眼タルハ知識
 ニ在ラス敬神仁徳ノ二者ニ在レハ此二者ニ於
 ケル吾人ノ進歩ハ敢テ際涯アラサルカ如シ
 第四 人。類。ノ。永。存。不。朽。ナ。ル。ヲ。欲。ス。ル。天。性。

シセロノ曰ク凡ソ人類其死後ノ事物ヲ顧慮ス
 ルノ特ニ厚キハ蓋シ造化主ノ吾人ノ靈魂ヲ永
 存不朽ナラシムルノ一確證タリト因テ顧フニ
 吾人ノ記功標ヲ立テ又ハ其他ノ方法ヲ用ヒ以
 テ後世ニ其名ヲ傳ヘント欲スルハ即チ吾人ノ
 永。存。不。朽。ヲ。欲。ス。ル。念。ノ。成。跡。タリ故ニ若シ人類
 ノ心神ヲ永存不朽ナル能ハサル者トセハ斯ク
 吾人ノ永存不朽タルヲ假飾シ之ヲ希望スルハ
 何ノ故ソヤ又吾人ヲ現世ニ於テ全ク死ハスル
 者トセハ縱令來世ニ至リ倏焉其名ノ湮滅スル

ニ至ルモ何ソ之ヲ憂ウルニ足ランヤ又吾人ノ
 來世ニ於テ現世ノ美譽ニ感セス醜名ノ辱ヲ覺
 エストセハ何ソ其美譽ヲ思慕シ醜名ヲ忌疾ス
 ルノ理アラニヤ此ニ由テ之ヲ觀レハ上帝ノ吾
 人ヲシテ徒ラニ來世ニ永存不朽ナルヲ期望セ
 ンメ而ノ又漫ニ其望ヲ失ハシムルヲ思フカ如
 キハ上帝ノ仁德ニ不敬汚辱ヲ加フル者ト謂フ
 可シ
 然ルニ又或者ノ說ニ凡ソ人ノ永存不朽ヲ欲ス
 ルハ上帝ノ人ヲ欺クニ非ス人ノ自カラ己レヲ

欺キ因テ此世ニ於ケル其生存ノ愛自護ノ道ヲ
 變シ以テ之ヲ永存不朽ノ欲念ト為シ且ツ其自
 カヲ欲スルノ甚シキヨリ輕々遽カニ其永存不
 朽タルヲ決スルニ至ルト爲セ氏顧ミルニ人ノ
 其自護ノ道ニ於ケルト永存不朽ノ欲念ニ於ケ
 ルト全ク之レカ質ヲ異ニシ且ツ人ノ生ヲ欲シ
 死ノ惡ムノ情ハ敢テ鳥獸ニ異ナルニ非サレ氏
 人ハ獨リ唯此性情ノミニ止マラス其生存ノ際
 涯ヲ究期ナキヲ欲スルノ念ヲ懷キ又人ハ縱
 令現世ニ於ケル其命ノ此世ニ畢ルヲ知ル雖

凡更ニ來世ニ至リ再新復生ス可キヲ期スルノ
 念力強盛ナレハ逝然其身ノ此世ヲ辭謝スル後
 ト雖凡猶其名ノ永ク世上ニ存スルヲ欲スルニ
 轉其意ヲ留メ而シ又凡ソ人類ノ慣習中ニ就キ
 之ヲ言フニ僅カニ此短々タル現世ニ於ケル生
 存ノ爲メ日ニ勞走スル獸類ト特ニ其趣ヲ異ニ
 スル者ハ凡ソ如何ナル地方ニ於ケル人民ト雖
 凡來世ノ生存ニ多少其意ヲ留メ以テ之ヲ貴重
 セサル者ナキニ在リ故ニ耶蘇教ヲ信奉スル各
 國ヨリ東洋ノ回々教及ヒバゲン教ヲ信奉スル

各國ニ至ル迄舉ケテ皆死者ノ爲メ埋葬火葬灌
 尸喪式等ノ事ヲ行ヒ且ツ生者及ヒ死者ノ爲メ
 禮拜ノ式ヲ行フハ期セシテ相同シク因テ以
 テ人類ノ深ク皆來世ノ生存ヲ信シ且ツ之ヲ期
 望スルヲ證スルニ足ルワトソノ曰ク人ノ靈
 魂ハ來世ノ生存ヲ以テ諸般ノ所願ノ中心及ヒ
 目的ト爲シ而シ諸般ノ欲念ハ皆來世ノ生存ニ
 歸向セサル者ナケレハ試ミニ問フ斯ク宇宙人
 類ノ舉ケテ搜索スル來世ノ生存ノ全ク無有ニ
 屬ス可キノ理アリヤ又上帝ノ完全無瑕ナル懿

自然神教 卷三 五三 文部省

業中凡ソ全世界ノ深ク期望スル一大主眼アルニ豈ニ其大主眼ニ適應シ來世ニ生存セサルノ理アラシヤト又コレリツダノ曰ク凡ソ人類ハ言ヲ待タス各種ノ鳥獸ニ至ル迄其天性ニ原ク實際上ノ豫見アリ而シテ其普ク全種ニ通スル豫見ハ必ス皆其虚妄ニ屬セサルヲ常トスレハ顧ミルニ天ハ必ス其豫言ヲ實際上ニ成就シ而シテ又天ハ必ス其約言ヲ踐行セサルナケレハ豈ニ獨リ萬物ノ靈タル人類ニ對シ以テ虚妄ヲ説キ其望ヲ失セシムルノ理アラシヤト

第五 人々親愛ノ情ハ其人ノ死後ニ存在シ將來更ニ復會スルヲ期望セシムル事

吾人ハ獨リ已レノ永存不朽ナルヲ欲スルノミナラス又其親子兄弟夫婦朋友ノ永存不朽ナルヲ期望スレハ若シ其死スル時ハ諸般ノ方法ヲ用ヒ諸般ノ工夫ヲ盡シ以テ其記念ヲ永遠ニ繼存セシムルヲ欲ス是レ世ノ死尸ニ灌シ以テ其腐敗ヲ防グ方法ノ因テ起ル所以ニシテ又凡ソ立像、畫像、指環、遺骸ノ類ヲ尊重愛敬スルハ我カ死去セシ親族朋友ノ記念ヲ尊シ更ニ其復會ヲ

自然神教 卷三 五三 文部省

欲スルノ意ニ原キ而メ又其復會ヲ期望スルカ
 爲メ我々其親族朋友ヲ喪フノ憂痛ヲ輕減シ且
 ヲ來世ニ至リ更ニ己レノ愛慕追念スル人ト再
 會スルノ望アルヨリ亦己レノ死ヲ恐ル、ノ念
 ヲ輕減シ以テ大ニ其心ヲ慰安セシム
 然レモ上帝ノ意ニ因リ人類ノ本質ヲシテ或ハ
 其朋友ヲ喪フヤ頓ニ之ヲ追思スルノ情ヲ減シ
 以テ再會ノ望ヲ絶スル者タラシム可キハ其難
 キニ非サル敢テ言ヲ待タス然リ而ノ鳥獸ノ如
 キハ皆斯クノ如キ者タレハ譬ハ今犬馬ノ如

キハ縱令如何ニ其主ヲ慕ヒ智慧アル者ト雖モ
 頓ニ之ヲ忘ル、カ故ニ若シ新タニ己レヲ蓄養
 スル者アレハ亦之ノ愛慕スル猶先主ニ於ケル
 ト敢テ異ナラス因テ思フニ凡ソ人類ノ命運ヲ
 獸類ト同シク僅カニ唯此現世ノミニ畢ル者ト
 爲ス時ハ其理亦其本質モ獸類ニ同シカル可シ
 ト雖モ人ノ親戚朋友ヲ喪フヤ其愛慕ノ情ハ依
 然トシテ昔日ノ如ク敢テ之ヲ失ハス此ニ由リ
 之ヲ考フレハ人ノ愛慕ノ情ノ常ニ永存スルハ
 死者ニ再會ヲ得可キ一證ニシテ又其愛慕ノ情

ノ死者ヨリ後ニ存スルハ即チ其再會ヲ指示ス
 ルニ在レハ更ニ之ヲ申言スルニ若シ果シテ人
 類ヲ來世ニ生存ス可キ者ト爲サハ上帝ノ吾人
 ノ本質ヲ造設セシ方法ハ實ニ其惠澤ノ深厚ナ
 ル感戴ニ堪ヘスト雖モ若シ其來世ニ生存スル
 能ハサル者ト爲サハ顧ミルニ親族朋友ヲ愛慕
 スル情バ其人ノ既ニ死亡シタル後ニ存シ以テ
 徒ラニ過去ヲ追懷スル念ノ獨リ吾人ヲ惱マス
 ノミナラス現在目下ノ幸福ヲ享クル之レカ妨
 害ヲ爲シ來世ニ於ケル虚妄ノ望ヲ以テ吾人ヲ

侮弄スルニ似タレハ人類ハ各種ノ各物中最不
 幸ノ者ト謂フ可シ故ニ若シ人類ノ靈魂ヲ僅カ
 ニ唯此現世ニ朽廢スル者トセハ要スルニ吾人
 ノ獨リ己レノ爲メ其永存不朽ヲ欲スルノミナ
 ラス己レノ愛慕スル各人ノ爲メ其永存不朽ヲ
 希フ本質アルノ理ナシ
 第六 又。人。ノ。善。惡。ヲ。辨。知。ス。ル。本。質。ト。景。狀。ト。ニ。
 原。ク。論。理。ハ。更。ニ。詳。カ。ニ。解。明。セ。サル。可。カ。ラ。サ。レ
 ハ。之。ヲ。左。ニ。掲。ク
 夫レ上帝ハ吾人ニ賦與スルニ善惡辨知ノ心ヲ

以テスレハ他人ノ行爲ハ固ト敢テ言ヲ待タス
 己レノ行作ト雖凡亦其善惡曲直ヲ辨知セシメ
 而ノ又其辨知ハ敢テ之レカ感動ヲ生セシメサ
 ル無情ノ判決ニ非ス必ス其或ハ嘉納シ或ハ棄
 斥スル情ヲ發セシムル者タレハ試ミニ問フ此
 ノ如キ發情ハ其由來スル處何レニ在リヤ又善
 ヲ行ヒ徳ヲ修ムル時其衷心ニ之ヲ快シト爲ス
 ノ念ハ何レノ處ヨリ來ルヤ不善ヲ行ヒ邪曲ヲ
 謀ルノ時之ヲ痛悔スルノ念モ亦何レノ處ヨリ
 來ルヤト因テ答ヘテ言ハントス曰ク其由來ス

ル所ハ善ハ稱讚褒賞ノ酬ヲ受ク可ク惡ハ譴責
 懲罰ノ報ヲ受ク可キヲ其内心ニ確信スルニ出
 テ而ノ我カ其本心ノ判決ハ更ニ高尚ナル上帝
 ノ審判ニ從ヒ以テ發生シ吾人ノ目下其心中ニ
 愉快或ハ痛悔ノ情ヲ發スルハ更ニ來世ニ至リ
 或ハ幸福ヲ享ケ或ハ禍殃ニ罹ルノ兆表及ヒ端
 緒タルノミ
 斯ク上帝ハ人類ヲシテ善惡曲直ヲ辨知セシメ
 且以其辨知ニ副ヘ以テ應當ノ感情ヲ發動セシ
 ムルニ就キ之ヲ觀ル時ハ敢テ上帝ノ自カラ善

自然者
辨知
三
辨
辨

惡ノ辨知ヲ爲サルヲ思フ可キニ非ス故ニ上帝ノ此世ヲ統制スルヤ善ヲ賞シ惡ヲ罰シ以テ其善ヲ愛シ惡ヲ忌ムノ意ヲ吾人ニ明示スルヲ期望ス可キノ理ナレハ夫ノ現ニ善者ノ幸福ヲ亨ケ不善者ノ災禍ニ罹ルハ實ニ上帝ノ賞罰ト稱ス可ク然レ凡ノ賞罰ノ此世ニ於ケルハ人類ノ善惡ヲ辨知スル其心情ヨリ期望スル標度ニ及ハサル者遠ク而シテ此世上幸福ノ原因タル外部ノ利益ハ敢テ必スシモ善者ノ之ヲ亨ケ不善者ノ之ヲ亨クル能ハサル一定ノ則アルニ非

サレハ間善者ノ不幸ニ陷イリ艱難憂苦ノ中ニ痛ヲ吞ム者アリ又不善者ノ幸福ヲ得テ跋扈誇耀日ニ其勢力ノ盛大ナル者アルカ爲メ或ハ善徳ノ微芽ヲ傷ヒ以テ之レカ滋生ヲ妨ケ凋枯セシムルニ至ル者敢テ亦稀ナラスト雖氏顧ミルニ吾人ノ天性タルヤ唯目ニ此等ノ景狀ヲ視テ敢テ心ニ之ヲ顧思セサル可キニ非サレハ必ス不善ヲ忌疾シテ賞罰ノ正ヲ得サル或ハ此ノ如キ者アルモ永ク不善者ノ其幸福ヲ受クル能ハサルヲ確信シ而シテ又縱令此現世ニ於テハ或ハ

自然者
卷三
三十七
文部省

此ノ如クナルモ來世ニ至リ必ス全ク其姿ヲ一
變ス可キヲ其衷心ニ決ス可シ
前ニ記スルカ如ク凡ソ人類ノ心中此現世ニ於
テハ善惡賞罰ノ間其正ヲ失フ者アルモ來世ニ
至テハ其賞罰全ク之レカ當ヲ得テ善者ハ必ス
幸福ヲ亨ケ不善者ハ必ス禍殃ニ罹ルヲ思フ是
レ天性ノ然ラシムル所タリ因テ今試ミニ現世
ニ於テ善惡賞罰ノ其正ヲ得サル所以ヲ論スル
ニ蓋シ現世ハ審判賞罰ノ世ニ非ス試閱歴驗ノ
世タルノ分明ナルハ人類ノ能力及ヒ其景況ヲ

以テ之ヲ證スルヲ得レモ亦其善惡兩者ノ互ニ
混合錯雜スルカ爲メ兇者ト雖モ之ヲ罰スルノ
十全ナル能ハス善者ト雖モ之ヲ賞スルノ十全
ナル能ハサルカ如キヲ覺ユ然リ而シテ其畢竟ヲ
要スレハ蓋シ善者ハ益其善ヲ固カラシメ不善
者ハ自カラ其不善ヲ悔ヒ以テ善ニ遷ラシムル
爲メ故ヤラ之ヲ兩存セシムルニ在ルカ如ク然
レモ上帝ノ稱譽ヲ受ケ以テ其愛ヲ被ル可キハ
畢竟何物タルヤ之ヲ知ルヲ敢テ難キニ非サレ
ハ此現世ニ於テ上帝ノ其善ヲ愛シ不善ヲ疾ム

ノ意ヲ表示セシト其善惡賞罰ノ此現世ニ於テ
完全ナラサルトニ就キ以テ之ヲ觀ル時ハ此現
世ニ於ケル上帝賞罰ノ約束ト其端緒トハ來世
ニ至リ全ク其成績ヲ表ス可キ取テ疑ヲ容レサ
ル所ナリ
又試ミニ思ヘ人類ノ性若シ善ノ愛ス可ク不善
ノ疾ム可キヲ覺エス且ツ善ヲ行フモ之ヲ快ト
セス惡ヲ行フモ之ヲ悔ヒサル者トセハ敢テ上
帝ノ懿德ヲ其心ニ解スル能ハス亦敢テ上帝勸
善懲惡ノ統制ヲ其心ニ期望スル能ハサル可ク

而ノ又若シ上帝勸善懲惡ノ統制ヲ此現世ニ於
テ完成全了スル者ト爲サハ人類ハ更ニ來世ニ
於テ生存スルヲ期望スルノ理ナク且ツ若シ此
世ニ於テ善人ハ悉ク其善ノ褒賞ヲ受ケ惡人ハ
悉ク其惡ノ懲罰ヲ受クル時ハ此世ハ即チ上帝
統制ノ結局タルヲ信セサルヲ得ス然レ氏人類
ハ現ニ其本心ノ教示及ヒ天意ノ整備ニ因リ善
ハ必ス上帝ノ賞ヲ受ク可ク惡ハ必ス其罰ヲ被
ル可キヲ悟リ且ツ此現世ニ於テ善惡ノ二者相
混淆シ以テ其幸福災禍ノ紛紜錯雜タルヲ見ル

時ハ畢竟此現世ハ試閱警戒ノ世ニシテ恰モ好ク其目的ニ適合シタルヲ知ル可ク是レ之ヲ此現世ノ景狀ヲ正シク回顧シタル意見ト謂フ可シ此ニ由テ之ヲ觀レハ人ノ生存ハ僅カニ唯此現世ノミニ止マラス必ス亦其來世ニ及ヒ而メ來世ニ於テハ現世ノ善ハ之ヲ完全ナラシメ以テ其褒酬ヲ受ク可ク又現世ノ惡ハ縱令爾來聽忍セラル、ト雖片終ニ必ス其罰ヲ被ル可ク又凡ソ現世ノ不善不義ハ舉ケテ之ヲ洗滌シ以テ百事整齊セサルナク又此世ノ善惡ハ悉ク皆應

當ノ賞罰ヲ受クルニ至ルヲ解ス可キナリ前ニ記載セシ靈魂不朽ノ論說及ヒ其論說ト趣旨ヲ同ウスル爾餘ノ論說憑據ノ確固タルハ世上人類ノ普ク感覺スル所タレハ此ニ今其道理ニ適セシ旨ヲ證明シ且ツ之レト同シキ一箇特別ノ憑據ヲ表示スル爲メ左ノ一說ヲ考思セサル可カラス

第七 人類一般舉ケテ皆未來ニ生存スルヲ信スル事

凡ソ理學者ノ論理、歴史家ノ口碑、詩人ノ寓言、神

傳記者ノ想像論ヨリ全世界人類ノ風俗ニ至ル迄皆人ノ此世ヲ去ル後猶其生存スルヲ信セサル者ナリ故ニ爾餘凡百ノ事ノ如キハ各國ノ人民互ニ其信スル所ヲ異ニスレバ獨リ靈魂身體二者ノ同時ニ死亡スルニ非サルヲ信スルニ至テハ互ニ皆其見ヲ同ウシ而シ又夫ノ有用ナル技藝、雅妙ナル學識ノ如キハ多年ノ星霜ヲ經テ世人或ハ之ヲ遺失スル者アリト雖モ靈魂永存ノ說ニ至テハ亘古未タ曾テ之ヲ遺失セシ者アラサレハ人ハ其永存不朽ヲ望ムカ爲メ縱令如

何ナル禍袂痛苦ニ遭フモ能ク之レニ耐忍スルヲ得、且ツ其期望ノ宇内ニ普ク且ツ其恒久ナルハ凡ソ地球上各國ヲ遍歷周遊セシ者縱令如何ナル矇昧無文ノ地ニ到ルモ其人民皆靈魂永存ノ說ヲ信セサルナキニ因リ以テ之ヲ證スルニ足リ而シ間、或ハ此信心ナキヲ言フ者アレバ審カニ之ヲ考究スル時ハ其言ノ誤マレ也ヲ知ル可シ
此ニ又古來或ハ其心情ノ薄倣硬戾ナルヨリ世人ノ普ク信據スル靈魂永存ノ說ヲ委棄スル者

ナキニ非スト雖凡要スル此輩ノ如キハ其數極
メテ寡ナク且ツ夫ノサドツク及ヒエピキユリ
ユスノ門ニ入リレ輩ノ如キハ互ニ其聲ヲ同ク
シ以テ靈魂ノ消滅ヲ稱スレ凡宇内人類ノ舉ケ
テ皆靈魂ノ永存ヲ期望スル歡呼ノ聲中ニ在テ
ハ敢テ之ヲ聽ク能ハサル可シ
此ニ今試ミニ問フ斯ク人類ノ舉ケテ靈魂永存
ノ理ヲ信念スル其緣由ハ如何又世界人類ノ未
タ嘗テ一大會集ヲ爲シ以テ相與ニ靈魂永存ノ
理ヲ確信スルヲ其信奉ノ一項ト定メシヲ聞カ

スト雖凡斯ク舉ケテ之ヲ信スルハ其理如何ト
而ノ或者之シニ答ヘテ曰ク凡ソ人類ノ舉ケテ
上帝アルヲ信シ及ヒ靈魂ノ永存スルヲ信スル
ハ畢竟太古ノ口碑ノ漸ニ後世ニ遺傳セシニ因
ルト然レ凡或者ノ言ノ如キ顧ミルニ敢テ其當
ヲ得ルト爲ス可キニ非ス故ニ若シ此言ヲ以テ
果シテ其當ヲ得スト爲サハ靈魂永存ノ信ハ造
化主ノ原ト人心ニ彫鏤セシ者ト爲スニ非サレ
ハ則チ人ノ本質及ヒ景况ヨリ自カラ發生シ來
リ以テ相抗スル能ハサル者ト爲サ、ルヲ得ス

因テ思フニ若シ此靈魂永存ノ信ヲ原ト造化主
ノ人心ニ彫鑿セシ者ト爲ス時ハ即チ是レ天ヨ
リ入ニ來世ヲ指示シ其永存ヲ告知スト謂フニ
同シク而シテ又此理ノ證憑ハ極メテ瞭然タルカ
故ニ人ノ性ノ之レニ抗スル能ハサル者ト爲ス
時ハ世界人類ノ舉ケテ皆誤謬ノ說ヲ確信スル
性アラサルハ吾人ノ保證シ得可キ所タレハ凡
ソ人類ノ靈魂永存ノ理ヲ信スルハ則チ其謬信
ニ非サルノ一證トス可シ
又或者ノ論ニハ凡ソ人ハ間誤謬ヲ信スルノ恐

自然神教

卷三

ナキニ非サレハ靈魂永存ノ理ヲ信スルカ如キ
モ或ハ亦其誤謬ニ屬スルノ恐ナキニ非スト爲
セ氏顧ミルニ靈魂ノ來世ニ永存スルヲ信スルカ
如キハ實ニ永久普通ノ者タレハ人類爾餘ノ誤
ニ於ケルト全ク其質ヲ異ニシ且ツ世上苟モ一
箇ノ法教ヲ開ク者ハ皆此未來存在ノ說ヲ其教
ノ一分ト爲サ、ルナシ因テ此ニアイサツクテ
イロルノ語ヲ引抄シ以テ之ヲ解明スルニ凡ソ
人ノ信奉スル法教中ニ獨リ其法教ノミニ就キ
特別固有ノ者ニシテ爾餘ノ法教ト全ク相異ナ

ル論説ノ如キハ必スシモ其誤謬ニ非サルヲ保
スル能ハスト雖凡人類敬神ノ本性及ヒ人ノ心
中其目ニ觸レサル造化主アヤノ確信ハ之ヲ稱
シテ誤謬ト謂フ可カラサルニ同シク人ノ死後
ニ至リ果シテ某種ノ幸福アルヲ期望スルカ如
キハ或ハ其妄想ニ屬スル者アリト雖凡世界人
類ノ舉ケテ皆其身體ノ死後ニ至リ靈魂ノ永存
スルヲ信スルハ敢テ誤謬タラサル可シト故ニ
人ノ屢誤謬ヲ信スルハ必ス欺騙者又ハ固執者
ノ言説ニ惑迷セラル、カ如キ人作頗僻ノ原因

ニ出テ或ハ其理論ヲ唱ヘ法教ヲ立ツル者ノ虚
望邪心ニ因ルト雖モ凡ソ人類ノ舉ケテ皆期望
確信スル所ハ要スルニ固ト其天然ノ本性ヨリ
發起スル敢テ疑ヲ容ル可キニ非サレハ縱令如
何ニ之ヲ矯曲屈撓シ或ハ之ヲ抑壓束制シ或ハ
少シク其實ニ過クル論説ヲ講スルモ必ス其古
今各國ニ再起シ敢テ其勢力ヲ減スルヲナク又
其本質ヲ變スルヲナカル可シ因テ思フニ凡ソ
天地ノ結構ニ於テ實ニ真理調和ノ在ルアリト
爲サハ人ノ其期望及ヒ確信ハ敢テ真ナラサル

ナカル可ク而ノ又其確信中最重要ノ者ハ即チ
 智カアル元始上帝ヲ信スルニ在テ之レニ亞ク
 者ハ未來ノ生存及ヒ來世ノ應報ヲ信スルニ在
 リ然ルニ今若シ靈魂永存ノ説ヲ駁論シ以テ來
 世ニ生存セスト爲スハ譬ハ猶生物ノ微憑ニ
 必ス未來ノ變容アル可キ明證ヲ見テ敢テ其變
 容アラサルヲ固執スルカ如シ
 上文既ニ所論ノ局ヲ了セシヨリ自カラ又左ノ
 一論理ニ及ホサルヲ得ス因テ之ヲ次ニ記ス
 第八類ニ因レル論理

此ニ今上帝ノ死者ヲ更生セシムル説ヲ信ス可
 カラスト爲スカ如キハ抑將タ何等ノ故アリヤ
 ト一疑問ヲ生スル時ハ必ス靈魂ノ永存ニ關ス
 ル重要ノ難事ニ論及セサル可カラス而シテ又其
 難事ヲ擯排シ或ハ之ヲ減除スルニハ夫ノ類似
 ニ因レル論理ニ據ラサル可カラサレハ此ニ其
 梗概ヲ舉クルニ蓋シ人ノ死スルヤ其靈魂ハ身
 體五官ヲ以テ之ヲ識認スル能ハサルニ至レハ
 顧ミルニ其靈魂ハ全ク朽廢シ更ニ之ヲ起生セ
 シムル能ハサルヲ思想ス可キカ如シト雖凡今

試ニ天地間ノ萬物ヲ回視スル時ハ縱令如何ナル遽劇ノ變化アリト雖凡之レカ爲メ敢テ其物體ノ生存力ヲ失ハサル者間、寡ナカラズ加フルニ凡ソ天地間ノ萬物ハ舉クテ皆大ニ其狀ヲ變化セサル者アラサレハ譬ハ森林ノ樹木ノ如キハ四時ノ流行ニ從ヒ其枝葉相損落シ又園庭ノ花卉ノ如キモ互ニ相凋謝シテ百日ノ紅ヲ保ツ者ナク又冬時ノ嚴寒互冷ニ逢ハハ草木ハ一時皆衰殘凋枯ノ色ヲ形ハシ天地ノ景狀暗淡トシテ荒蕪ニ歸ス可キカ如シト雖凡雪霜既ニ

降ラス池氷既ニ解ク圓轉タル鳥聲ヲ聽クニ及ハハ陽春ノ和氣更ニ田野ニ洽ク滿目ハ光景其暢快ナルハ實ニ言詞ノ悉ス可キニ非ス此ニ由テ之ヲ觀レハ冬時荒殘ノ原野ヲ變シ以テ陽春發生ノ新美ヲ此地上ニ敷キ天地ノ景狀ヲ更新スル上帝ハ豈ニ敢テ其再生力ヲ墳墓ノ底ニ及ホシ以テ世上逝者ノ枯骨ヲ更生セシメサルノ理アラシヤ然レ凡或者ノ論ニ曰ク凡ソ草木ノ凋枯ハ生活物ノ死亡ト原ト其類ヲ異ニシ敢テ感覺動行ノカラ有セサレハ日ヲ同ウシ以テ論

不可キニ非ス故ニ上ニ記スル比喻ノ如キハ五
 ニ其質ヲ異ニシ舉ケテ以テ人ヲ例ス可キニ非
 サレハ類似ニ因レル論理モ亦敢テ其當ヲ得ル
 トス可キニ非スト因テ今更ニ生物ニ就キ之ヲ
 言フニ凡ソ生物中ニハ全ク其體ノ變易スル之
 ヲ人。類。靈。魂。ノ。永。存。ニ比スレハ更ニ一層驚クニ
 堪ヘ以テ一旦死亡セシ其體ノ更生スルカ如キ
 姿ヲ爲ス者アリ故ニ譬ヘハ或種ノ羽蟲ニ於ケ
 ルカ如キ其初メハ敢テ動行スル能ハスト雖凡
 漸ニ動行ノカヲ得以テ地上ニ蜿蜒匍匐シ既ニ

メ復タ幾モナク其動行ノカヲ失ヒ其狀恰モ死
 セシカ如ク然ル後ニ更ニ其體ヲ一變シ以テ大
 ニ勢カヲ得テ空中ニ飛揚スレハ想フニ人類モ
 亦之レニ同シク數回其姿ヲ變易セサルノ理ナ
 カル可ク故ニ人ノ死亡スルカ如キモ或ハ其永
 存繼進中ノ一段落ニ屬シ更ニ高尚ノ姿ニ進轉
 スル一步タルモ亦得テ料リ知ル可キニ非ス蓋
 シ人類幼稚ノ際ニ於ケルト其成年衰老ノ際ニ
 於ケルト全ク互ニ其趣ヲ異ニスルハ恰モ全ク
 其生ヲ異ニスルカ如クナレハ人類ノ來世ニ於

テ生存ス可キヲ思想スルハ猶其初生ノ際ヨリ
 今ニ及フ迄既ニ閱歴セシ數回ノ變易ヲ更ニ閱
 歴スルヲ思想シ又爾餘ノ生物ノ變易スルニ同
 シク吾人モ亦變易スルヲ思想スルカ如クナレ
 ハ得テ之ヲ理ニ適セサル者ト爲ス可カラズ因
 テ此ニアイサツクテイロルノ語ヲ引キ之ヲ言
 フニ凡ソ植物動物ハ日ニ時ニ無數無量ノ變易
 ニ逢フト雖凡敢テ其死滅セサルヲ目撃スル時
 ハ人モ亦之レニ同シク不同不可思議ノ變易ニ
 逢フモ敢テ其死滅セサル可キヲ信スルハ固ト

其理アリト

此ニ又其著目ヲ前ニ記スル所ト異ニシ以テ類
 似ニ因レル論理ヲ考究スル時ハ其畧亦左ニ記
 スルカ如シ
 抑天地萬物ノ理ニ就キ以テ之ヲ考フルモ或ハ
 人心上ノ理ニ就キ以テ之ヲ考フルモ凡ソ災禍
 ニ全ク其善美ノ報酬ヲ缺ク者アラサレハ往時
 ハ人ニ禍害ヲ生シ毫モ裨益ナキヲ思想セシ物
 件ノ如キモ近世格物究理ノ講究日ニ精ナルヨ
 リ却テ其大ニ人ニ補益アルヲ解スルニ至リシ

者多ク故ニ此世ノ災害禍殃ノ如キモ亦帝ニ吾人ヲシテ不幸ナラシムルカ爲メノミニ非ス必ス我カ幸福ノ深ク感謝ス可キニ足ルヲ指示シ且ツ數種ノ方法ヲ以テ人類ノ品行知識ヲ改良スルノ用ニ供スル者タリ然ルニ今若シ人ノ此世ヲ去ルヲ其生存ノ終期ト爲サハ顧ミルニ其死前ノ病患痛苦ハ徒ラニ人ヲ懊惱セシムルニ過キサレハ其苦痛ノ爲メ毫モ裨益ヲ被ルヲ能ハサル可シ故ニクロムビーノ著ハセシ自然神教ノ書中ニ曰ク凡ソ人類ハ審カニ能ク其百般

ノ禍殃災害ヲ必ス皆善美ノ報酬アル可キ者ト思做ス時ハ夫ノ我カ身體ヲ苦痛セシメ我カ心神ヲ懊惱セシムル最終ノ大災禍タル死亡(此大災禍ハ何人ト雖厄之ヲ免カル可カラス)ノ如キモ徒ラニ其害アリ以テ益ナキ者ト爲ス可キニ非ス此大災禍モ亦爾餘ノ災害ニ同シク到底人類ノ裨益ヲ爲ス可キカ故ニ縱令一時ハ少シク其生存ノ進行ヲ停ルカ如シト雖厄終ニハ之ヲ更新シ以テ幸福ヲ増益セシム可ク而メ又此ノ如キハ即チ上帝ノ此世ヲ統制スル大圖計ニ吻

合スレハ夫ノ徒ラニ人ヲ病患痛苦ニ罹ラシメ
敢テ其益ナキヲ想フカ如キハ上帝ノ明意ト全
ク齟齬セシ者ト謂フ可シト
然レモ又或者ノ論ニ曰ク凡ソ人類ノ死病ニ罹
ル災禍ヨリ生スル裨益ハ其死者ノ一身上ニ於
ケルヨリ却テ後ニ生存スル者ニ及フ可シト蓋
シ此説ノ如キハ頗ル其要ヲ得ル者ト謂フ可ク
故ニ若シ現ニ生存スル輩ノ日ニ時ニ死亡スル
病者ノ景狀ヲ審視シ以テ自カラ已レヲ戒ムル
時ハ之レカ爲メ必ス若干ノ裨益ヲ其身ニ被ル

敢テ疑フ可キナク且ツ甲人ノ痛苦不便ハ却テ
乙人ノ資益ヲ生ス可キ是レ此世上自然ノ勢タ
レハ敢テ怪ムニ足ラスト雖モ更ニ審カニ省思
スル時ハ要スルニ其痛苦不便ヲ患フル者ハ僅
カニ唯己レノ鑑ヲ他人ニ示シ之ヲ益スルノミ
ナラス其身モ亦親カラ其益ヲ被ラサルノ理ナ
シ然ルニ若シ人ノ一旦死亡シ以テ此世ヲ去ル
ヤ其命全ク此ニ終リ敢テ來世ニ再生スル能ハ
ストセハ死者ハ此世ノ痛苦ノ爲メ到底其益ヲ
被ル能ハサル可ク而メ又或者ノ論ニ據レハ凡

ソ人ハ其死スル、疾病ノ痛苦ヲ免カルレハ是
 レ其人ニ却テ若干ノ裨益ヲ爲ス者間、寡ナカラ
 スト蓋シ此言ノ如キハ之レカ畢竟ヲ要スルニ
 敢テ我儕ノ論理ヲ排スルニ非ス却テ之ヲ固ウ
 スル者タレハ此ニ其然ル所以ヲ言フニ凡ソ人
 ノ死亡ハ固ト無上ノ大袂禍タレハ今若シ人ヲ
 其死前ノ痛苦ニ堪ヘス以テ死ノ來ルヲ待チ之
 ヲ悦フ者ト爲スニハ其一旦此世ヲ去ルノ後更
 ニ來世ニ再生レ以テ其痛苦ノ償ヲ得テ痛苦ノ
 裨益ヲ被ル可キヲ確信スルニ非サレハ其痛苦

災禍ヲ天地萬物類似ノ理ト吻合セシムルヲ得
 サル可キニ因レリ(又此ニ讀者ヲシテ注意セシ
 ム可キハ經典中人類來世ノ生存ヲ論スル其文
 中ニ此世ノ禍袂ハ未來ノ享福ノ爲メ充分ニ其
 償ヲ受ク可キヲ記セシニ在リ)
 此ニ又更ニ夫ノ類似ノ論理ニ著目スル方法ヲ
 一變シ以テ之ヲ論スル時ハ其概略左ニ記スル
 カ如シ
 夫レ漸進ハ自然ノ大法ニシテ凡ソ何物ト雖、
 頓ニ整齊シ以テ完全ニ至ル者アラス舉ケテ皆

數箇ノ階級ヲ經過シ次ヲ逐ヒ進歩スルカ故ニ
縱令無機體ト雖モ數回亦其體ヲ變シ漸ニ進ム
ニ非サル者ナシ故ニ譬ハ草木ノ如キハ其初
メ必ス皆種子ヨリ其萌芽ヲ生シ以テ漸ニ生熟
シ又生物ノ如キハ其完全具備ノ景狀ニ達スル
前敢テ數回其體ヲ變易セサル者ナク而ノ又凡
ソ千種萬類ノ其完全ノ景狀ニ達セシ後ニ更ニ
之ヲ回視スル時ハ萬物互ニ皆其次序ヲ正ウセ
サル者ナキヲ知ルニ足レハ譬ハ無生物ノ如
キモ自カラテ亦種々ノ等級アリ以テ或物ハ全ク

粗ニシテ定形ナク又或物ハ其組成眞ニ巧妙ヲ
極メ以テ生活力ヲ具フルニ適セシカ如キヲ覺
エ又生物ニ至テハ其等階更ニ夥シク植物ノ如
キハ夫ノレリス河邊ニ腐敗スル微細ノ水艸ヨ
リ至藜草、藪蠅草及ヒ其他外物ニ感覺シ恰モ動
物ニ同シク一種ノ生活力ヲ具フルニ似タル草
本ニ至ル迄其等階頗ル多ク又動物ニ至テハ夫
ノ植物ニ類スル植蟲類ヨリ智力ノ萬物ニ勝レ
ル人類ニ至ル迄其等階ノ別ハ實ニ際涯アラサ
レハ今此類似ノ論理ヨリ推考スルニ現ニ此地

上ニ於テ見ル所ノ等階ハ敢テ此ニ盡クイルヲナク想フニ必ス更ニ高ク昇騰シ以テ此地上ニ於テ凡ノ上帝ノ創造セシ諸物ノ互ニ皆其等階ヲ分テ相整頓スルカ如ク上帝ノ統轄スル爾餘ノ各所ニ於テモ亦皆其整頓ノ姿ヲ同ウスル敢テ疑フ可キニ非ス而ノ又此地上ニ於テハ人類ヲ以テ萬物ノ長ト為シ降テ爾餘ノ千種萬類ニ至ル迄各互ニ其等階ヲ異ニシ漸ニ遞下スルカ故ニ推テ以テ之ヲ考フレハ又此人類ヨリ次第ニ上昇スル高等ノ階級アラサルノ理ナク又恰モ

此世ニ於テ其智ノ人類ニ及ハサル無數ノ生物アルカ如ク亦其智ノ人類ニ勝レル無數ノ物ノアラサルノ理ナシ故ニ之ヲ長鎖ニ喩フレハ想フニ人類ハ其長鎖ニ於ケル最終ノ鏈環ニ非ス其鎖ハ遠ク更ニ相連ナリ以テ其智ノ遙カニ人類ニ優レル高等ノ物ニ及フ可シ然レモ若シ人類此世ヲ去ルノ後全ク消滅シテ其生存ヲ失フト爲サハ恰モ猶其鏈鎖ノ斷破セシカ如ク階級ノ次序紊亂シ以テ上帝爾餘ノ業ニ敢テ見聞セサル一大間隙アルヲ覺ユ豈ニ此ノ如キノ理ア

ランヤ

前ニ記載セシ所ハ人ノ來世ニ永存スルヲ證明
スル論理中最重要ノ者ニシテ若シ其論理ヲ各
自ニ考フル時ハ其効力或ハ牢固ナラサルカ如
シト雖氏其數箇ヲ合スル時ハ自カラ確乎タル
其明證ヲ爲ス恰モ各自光線ノ力ハ微ナリト雖
氏之ヲ一ノ燒點ニ合スレハ其勢力極ノテ強大
ナルカ如シ故ニ此數箇ノ論理ヲ合シ以テ考フ

ル時ハ悖懵迷矇ノ雲霧ヲ散シ康寧多福ノ天道
ヲ瞭如タラシムルヲ得可シ

西泰 自然神教卷三終

目次ハ申文

卷三

吾

ト下目

自然神教

卷三

文部

[Redacted header text]

[Redacted main body text]

[Redacted footer text]